

# ⑩ 「いわての復興教育推進事業 (震災学習列車活用スクール)」 実践事例報告

報告：岩手県立宮古北高等学校  
ポスター製作：木田もゆる  
協力：災害文化研究会

## I 事業の概要 (地域の実情含む)

田老地区の復興工事も終盤となる中、震災を鮮明に記憶する生徒の数は少なくなり、生徒の会話から震災の話聞くことはなくなった。震災の記憶の風化と次の時代の担い手となる若者の人口減少が大きな問題となってきている。津波防災の意識を高め、震災後の地域の課題に向き合い、地域の担い手としての自覚を育てることをねらいとする。

## II 取組の概要

- (1) 事前学習 (朝読書の時間を活用)
  - ①事前学習プリント...三陸鉄道について
  - ②事前学習プリント
    - ア 震災時の三陸鉄道の状況と役割
    - イ うのすまい・トモスの意味
    - ウ いのちをつなぐ未来館の内容
  - ③事前学習プリント...鯨と海の科学館の内容



- (2) 全校遠足 (震災学習列車活用スクール)
  - ①震災学習列車活用スクール (宮古-鶴住居間)
    - ア 震災当時の状況と取組の説明、三鉄の使命
    - イ 復興状況の説明と確認
  - ②いのちをつなぐ未来館
    - ア 震災当時の状況説明と見学
    - イ 実際の避難経路を体験するワークショップ
    - ウ 津波の仕組みと怖さを知る
    - エ 釜石市防災市民憲章「命を守る」
  - ③鯨と海の科学館
    - ア 震災当時の状況説明と見学
    - イ 山田町と鯨の関係を知る
    - ウ 復興への思いと道のり



- (3) 事後研修
  - ①全校遠足ワークシート (研修レポート) を記入することでこれまでの自分との違いを確認した。
  - ②グループ毎にポスター発表を行い、クラス代表を選出し、9月の宮北の森 (全校集会) で各クラスの代表が、ポスター発表を行った。このことにより、それぞれの体験を共有し、自分たちの防災意識を高めることができた。



## III 取組の成果と課題

### 1 成果

- (1) 震災の記憶は風化するため防災教育を実施し、語り部として語り継いでいくことや避難経路を実際に確認することの大切さを学ぶことができた。
- (2) 報道されていたことと実際の状況が違うということを知ること、震災の状況を深く知ることができた。
- (3) 震災当時の高校生や中学生の行動が大きな役割を果たしたということを知り、自分たちの存在の大きさを知ることができた。
- (4) 自分の命は自分で守ること (津波てんでんこ) の大切さを改めて認識することができた。
- (5) 津波の怖さと高台避難の重要性を体験することができた。
- (6) 全校遠足ワークシート (アンケート調査) 75名中73名が回答(97%)

### 2 課題

- (1) 今回学んだことを、繰り返し形を変えて継続的に取り組んでいくこと。
- (2) 次年度のコース設定について検討すること。
- (3) ガイド料を報償費で支払うことが困難であること。
- (4) この取組が本校のみで終わるのではなく、内陸の他の高校にも波及できる形にすること。

## IV 生徒の感想

- ・ 防潮堤の存在が人の心を油断させてしまうので、安心してはいけないということ。
- ・ 死ぬ確立が1%でもあれば、避難すること。
- ・ 三陸海岸に押し寄せる津波の特徴を知ることができた。
- ・ 震災当時は小学校1年生だったので、津波への恐怖心や記憶があまりなかった。しかし、今回の体験を通して津波の怖さを学ぶことができた。
- ・ 実際に震災を経験した人の話が人の心に伝わるので、私たちが語り部として役割を果たすことが一番の防災になると感じた。